

その九

嶺村 法子



中央区の幼稚園では、夏休み中に五日間の夏季保育を実施しています。前半あるいは後半にまとめて五日実施する園もあれば、前半・後半に二三日間ずつ分けて実施する園もあります。内容はプール教室（水遊び）になっていますが、その中にお楽しみの要素を入れ込んでいる園もあります。

私たちの幼稚園では、後半のプール教室の後、“わくわく夏祭り”と名付けたお楽しみの日をつけて実施しています。最初は五日間の内の一日を

当てていたのですが、「プールでの遊びも十分に、夏祭りも思いきり楽しく」という思いから、後半二日間のプールを実施した後に、もう一日夏祭りの日を設けるようになりました。

教頭を始め、私たち一人ひとりがそれぞれ自分のやりたいことを提案し、コーナーを受け持ちます。プールサイドで水着のまま楽しめるよう、「石鹸ボーリング」や《フィンガーペインティング》を企画した年もありましたが、“わくわく夏祭り”をプール教室から独立させて実施するようになってからは、小学校の体育館を借りて行っています。昨年度は、《ペットボトルボーリング》《的あて》《スイカわり》などの他に、お母さん方の有志でコーナーを持ちたいという申し出があり、体育館にビニールプールを持ち込んでの《ドジョウすくい》が実現しました。

自由参加の夏季保育に、毎年かなりの参加があり、特に後半のプールや夏祭りは二学期に向けて

トミカラひろば

のウォーミングアップになっています。私たちに
とつても、子どもたちの夏休み中の成長を感じ、
二期期の生活を思い描くための貴重な時間になっ
ています。

八月二十八日

まっくろに日焼けした子どもたちが
久しぶりのプールにやってきた

滑り台とシャワーを合体した

ウォーターシユート

プールの中で手を広げて待つ私に

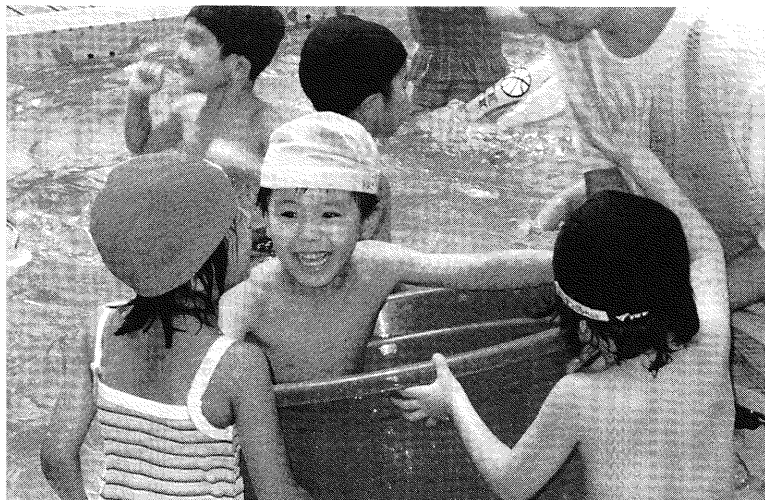
「先生はいなくていいから」

ちいちゃんはそう言う

勢いよく滑って

ザブンとプールに飛び込んだ

大きなタライの船の前にも行列ができる



▲「だれかのって!」「はい! 次はぼくだよ」タライの船は大人気

→→→→→ TOMI KARA ころは →→→→→

一寸法師よろしくタライに飛び乗ると

すかさず私がぐるぐる回す

いつまでも回るペアもあれば

バランスを崩して

あつという間に

プールの底へと沈んでいくこともある

そのスリルを求めて

なんどもなんども

列に並んでは

歓声をあげて沈んでゆく…

巧技台やフープを使ったトンネルには

色とりどりの水着が次々にくぐっていく

「イルカみたい！」

驚く私に

水中で見開いた目が笑い返す

その横で

水に顔をつけられなかった子が

「見えて」

と頭まで潜ってみせる

一瞬の後

必死の表情が笑顔になる

夏休みが

子どもたちの心身を

たくましく鍛えてくれたことを実感する

プールも終わり

いよいよ“わくわく夏祭り”の日

私はいつもの《あきかんタワー》

空き缶のブルトップを取り

テープを貼って穴をふさいだ空き缶を

大小取り混ぜて用意する

子どもたちは 三人ずつ

いくつ積めるか競い合う

トミカラひろば

「よい、スタート！」

ストップウオッチ片手に笛を吹く

大きい缶やら小さい缶やら

手当たり次第に積んでいく子

同じ大きさのスチール缶ばかり集めて

慎重に丁寧に積んでいく子

そこへよちよち歩きの弟が

きて

ひとつふたつと積み重ねて

は

にっと笑う

高く積んだり横にも並べた

り

いつの間にか見事なオブ

ジェのできあがり

高く高くと積んでいた子が

笛の合図で手を離す



◀「そうつとだよ」見ている方もハラハラドキドキ

ガンガラ ガラガラン

音響抜群の体育館に

空き缶の音が響き渡る

微妙なバランスを保って

見事十一個積んだ子もいる

◆◆◆◆◆ TOMIKARA ひろば ◆◆◆◆◆

たったこれだけの単純な遊びが

九月の保育室でも大はやり

段ボールのついたてで囲った中に

かごいっぱい空き缶を持ち込み

友達と高さを競い合う

ハデハデしい音と共に

子どもたちの笑い声が響く

「もう一回やろ！」

空き缶を積む

手を離し 数を数えた数秒後

スローモーションビデオを見るように

空き缶タワーがゆつくりと傾き 弧を描く

固唾をのんで見守るその数秒の緊張が

笑い声とともに はじけとぶ

ただそれだけのことが

どうしてこんなにも

子どもたちの心をとらえるのだろうか

そう問いながら

私もまた飽きもせず

毎年この日のために

空き缶を集めていることに

気付かされる

今こうして

問いへの答えを探しながら

ようやく立ち上がることができるようになった子の

積んでは崩す積み木遊びや

中世ヨーロッパの人々の教会建築

最近ブームの中老年の登山にまで

思いは巡り拡散する

高く高く…

人間は高みを目指す中で

自分自身の足元を確かにしていくのだろうか

安全で安心な日常生活があるからこそ

高く高く…と

ト・ミ・カラ ひろば

より不安定な遊びを求めるのだろうか

夏祭りの片隅の

小さなコーナーで繰り返される遊びの中にも

人間や保育について

考える材料が潜んでいる

顔を上げて見回すと

スイカ割りの子どもに

夢中になって声をかける大人たちがいる

口いっぱいにスイカをほおぼり

種の飛ばし方を伝授する

ドジョウのぬるぬるに悪戦苦闘し

ボーリングでストライクをねらい

本気で的当ての球を投げている

大人も子どもも

一緒に楽しむ夏休み最後の日があつて



◀タライに群らがり牛乳パックを手にするりぬると逃げるドジョウと格闘する子どもたち

その余韻の中に

二期期のはじまりの遊びが生まれる

今年の保育学会で、家庭の中から積み木を高く積み遊ぶが消えつつあることや、養成校にも積み木で遊んだことのない学生がいることが話題になった。教材としての遊びは、書物や実技研修からいくらでも学ぶことができるけれども、学んだことを目の前にいる子どもたちと一緒に楽しめるものにするためには、一度私自身の身体をくぐらせることが必要になる。その保育者の身体に、幼い頃の遊びの楽しさが蓄えられていないとしたら……「遊び」は一体何処へ行くのだろう。

養成校の先生から、自ら現場に出て、ガキ大将になって子どもたちと一緒に遊んだ事例や、学生に積み木で遊ばせる授業を試みた成果が報告されたことを思い出す。たとえ授業の中であれ、ひとつのことに打ち込んで遊ぶ楽しさを経験できた学

生は幸せである。子どもたちの遊びに引き込まれ、夢中になって遊ぶことから、保育者としての一歩は始まるのではないかと思う。

夏の日の一コマの楽しさを描こうとして、思いがけず保育者養成の課題にたどり着いてしまった。保育の現場にも養成校の現場にも、現実の厳しさを受け止めつつ、子どもたちのために心をくだいて働く人のいることが希望である。互いの試みや実践から得た洞察を共有し合うことで、子どもたちとの生活をより豊かにしていけたらと思う。

(中央区立月島第一幼稚園)

